

9 【かげのまたかげ】

これも、うららかな春の、午後の出来事。

村の春の魅力は、言葉であらわしにくい。

陽炎（かげろう）がたって、そのむこうに見える人は、誰でもみんなうつくしい。

まだ夏ではないのに、裸になってしまいたい、気持ちがわきおこる。

それはぼくだけではなく、ともだちもそうだという。

その日は、五月晴れというのだろうか、影も濃い。

その自分の影に、また影があるのに気づきました。

影だけでも御荷物（おにもつ）なのに、また影があるなんて、と気が重くなりました。

これは【おぼかげ】という、おぼけにちがいないと、【おぼかげ】といっしょに、足どりも重く、懐爺のところに行きました。

「たいへんじゃ。【おぼかげ】がついてくる」

ぼくは、体をひねってみました。

ぼくの影も、【おぼかげ】も体をひねる。

ぼくは、おならをしてみました。

ぼくの影も、【おぼかげ】もおならをする。

「【おぼかげ】とは、うまい名前をつけましたね。本当は【かげのまたかげ】というおぼけです。この〈また〉がつくおぼけは多くて、たとえば、【ゆめのまたゆめ】、【しりのまたしり】なんてのがいます」

懐爺は、のんきな声でした。

【しりのまたしり】という、おぼけの正体を知りたかったが、それどころではない。

「なんとかせいや」

ぼくがさわいでも、懐爺は余裕（よゆう）しゃくしゃくでした。

「こういう天気の良い日に、【かげのまたかげ】にでてくるなど命令するほうが、失礼でしょうね」

なんて、つぶやいています。

「どうしたらいいかのう」

まだ日は暮れないのに、ぼくは途方（とほう）に暮れました。

途方に暮れる、なんて言葉の意味はわからなかったが、おそらくこういう気分をいうのだろうと、おもっていました。

「どうせ金ちゃんのまねをしているだけですから、死んだふりでもすれば、【かげのまたかげ】は死んでしまうでしょう」

しかしぼくは、死んだふりなど、しませんでした。

【かげのまたかげ】を死なすのは、不憫（ふびん）だったから。

それでもそれからのぼくは、天気の良い日には、なるべく外にでないことにしました。